

西田とバロック哲学⁽¹⁾

檜 垣 立 哉

はじめに

私は京都にも京都学派にもほほいかなる関わりありませんが、この間、いろいろ日本哲学関係の仕事をしていただいております。私は基本的にはフランス哲学関係の学者であり、日本哲学にいささかの関心はある者ですが（これからのもくろみでいえば、吉本隆明や折口信夫、近代以前の日本思想をも視野にいたいとおもっております）、けっして京都学派が専門とはいえません。しかしさまざまな機縁により、講談社から『西田幾多郎の生命哲学』（二〇〇五年）を上梓させていただき、現在、ジョン・マラルド先生の監修のもとで同書の英訳の準備を進めております。また昨年二〇一五年には人文書院から『日本哲学原論序説』という（たいそうな題名の）本を出版させていただきました。上原先生からいただいた最初のお題が「京都学派を越え、日本哲学をこれから先につなげる」ことをどう考えればよいかということでしたので、この主題なら自分にひきつけていろいろいえるかなということ、僭越ながら今回の講演をおひきうけしただいです。

今回は上記の二つの著作ではなく、いま書いている別の本のほんの構想のようなものについて少しおはなしできればともおもうのですが、この著作の核になるものと、上記二つの書物はつながっておりますので、まずは上記二つの

書物について少しのべてみます。

最初に、二冊の本を書くにいたった私自身の経緯からおはなしさせていただきます。時間はだいぶ過ぎますが、大学院生のとき、指導教員ではありませんでしたが、坂部恵（先生。すみません、以下すべての方について敬称略にさせていただきます）の聲咳に触れることがおおくありました。八十年代の当時、坂部は、九鬼や和辻についての書物を積極的に執筆し、また大学での特殊講義も、たいいていは「日本語の哲学」にかんするものでした。そこでは時枝誠記や日本古典（世阿弥など）もあつかわれ、日本語で思考するとはどういうことかがおもな主題になっていました。率直にいえば、坂部の試みはある論点に収斂するものではなく、書物になった九鬼論も和辻論も、その人物像（とりわけ九鬼の、精神上の父としての岡倉天心）をあつかったものだったのですが、この時期の東京で京都学派を論じるというのは——もちろん下村寅太郎がおりましたが——かなり稀であったことは確かかとおもいます（ただし和辻も九鬼も三木も相当に東京の人ですので、どこまでを京都学派とするかは問題がありますが、広く西田の思想圏内とかかわる人物としておきます）。またそれとほぼ同時期に、中村雄二郎が西田について積極的に発言し（中村のバトスの知は三木清をおおきな下敷きにしておりますので、もとより熱烈な西田ファンであった三木から西田に向かうのは当然です）、さらに木村敏の著作が、精神医学における正常と異常という方向から当時かなり読まれておりました。この時期の木村の発想の根本に西田がいたことは間違ないところです。坂部も中村も木村も、その頃には一種の流行の「現代思想」として読まれたという文脈もあります。私はちょうどこの時期に大学院生であつたので、この流れの影響を確実に受けております。折しもポストモダン哲学とか、第二の近代の超克（廣松渉など）とかいう話題もでていたときであり、そこで日本の哲学者が「何を」しなければならぬのが問われはじめたのかとおもいます。余談ですが、坂部先生（ここだけは先生とつけざるをえませんが）と最後にお会いしたのも、二〇〇七年ですのではや

九年前になりますが、土井道子記念京都哲学基金主催シンポジウムに最初にお招きにあずかったときのことになります。個人的にもこの点は、相当重要な想い出になっておりますし、最後に京都でお会いできたということにも、何か因縁深いものを感じております。

ついで、これはまったく檜垣自身の事情ですが、ベルクソンとドゥルーズを九十年代の半ば頃からいろいろと読みこんでいたということがあります（ドゥルーズは一面徹底したベルクソニアンですので、その流れのなかで両者を対比的に読んでおりました）。しかしそこでベルクソンやドゥルーズを読みすすめていくうち、彼らがのべていることがあまりに西田の思想に近い、ということに改めて気がつかさせられたのです（あえていえば、ベルクソンを否定し乗り越えようという方向性が、西田とドゥルーズにおいて酷似しているのです）。これは、西田の時代背景を考えればある意味で当然のことです。もちろん西田はドイツ哲学や現象学から強い影響を受けてはいるのですが、一面ではベルクソンを摂取しつつそれを批判して乗り越えていったことも確かとおもいます。私には純粹経験以降のさまざまな試みが、ベルクソンの思考や、またドゥルーズがベルクソンを批判しつつ独自の思考をつくりあげた過程に、きわめて近いように感じられたのです。

このことは、考えてみれば奇妙なことでも何でもありません。ドゥルーズなどの現代思想は、現象学や分析哲学に対して一定の距離をおきますから、どうしても十九世紀的な思想に根拠を求めていきます。ドゥルーズの微分論は、西田が『自覚に於ける直観と反省』でもちいているのとはほぼ同じ論脈の思想家を参照しています。さらに、九鬼のプルーストからとったフレーズが、ドゥルーズの議論の根幹にでてくること（「現実的ではないが實在的であり、抽象的ではないが観念的である」）も重要かとおもいます。またドゥルーズはいうまでもなくマラルメの「賽の一振り」(Un

coup de dés) を重視するわけですから、ここから田邊の最後期との関連をみることはいくらでも可能です。最初から日本哲学を学んだわけではない私などは、きわめて変則的にドゥルーズから京都学派をみてしまうので、逆にそのあまりの類似性に驚いてしまうのです。加えていえば木村敏が、九十年代以降相当にフランス現代思想に関心を示し、むしろ西田的な思想からドゥルーズへの接近がなされたという事情もあります（本当をいえば事態はもっとこみついており、Bin Kimura の著作は仏訳もありますので、たとえば、アンリ・マルティネという精神病理と美学をやっている思想家が引用してありますが、同時にマルティネはリヨン大学時代に同僚であったこともあり、後期のドゥルーズに相当の直接的な影響を与えているということもあります。もちろんダイレクトな関係はありませんが、現在のグローバル社会において何がおこるかわかりません）。そんなわけで、私自身も西田について考えざるをえないとおもうようになりました。

私が『西田幾多郎の生命哲学』で、ベルクソンやドゥルーズの視角から西田を読もうとしたり、また『日本哲学原論序説』で木村敏のイントラ・フェストウム論を軸として、日本哲学をフランスやドイツの思想に対比させながら描きだそうとしたことは、上記の事情に深くかきなっております。後者の論考においては、私はあえて科学哲学者である大森荘蔵や、マルキストである廣松渉について、あたかも西田の影響を受けているように描きましたが、もちろん彼らの自意識として西田とのかかわりはほぼない（大森の「その毒性と感染力において最も悪性のウイルス」という発言は、何ともその雰囲気を感じています）としても、彼らの論じていたことが、主客二元論的な図式の廃棄であり、なおかつ純粹経験にも似たその位相の分化（大森であればさまざまな「重ね描き」論であり、廣松であれば「四肢構造」にあるならば、彼らが思考していたものはそう遠いとはいえません。さらに後期大森の『時は流れず』『無脳論』などの論考は、ベルクソンや西田等との関連でフランスでもかなりの関心をあつめております（こ

の点は、杉村靖彦やミッシェル・ダリシエによる日本哲学の仏訳の試みがおおきいとおもいます。

これらの事情からバロックの思想への繋がりを考えるならば、私は木村敏によるイントラ・フェストウム論の展開はやはり日本哲学、とりわけ京都学派の意義にとつて重要だとおもいます。木村が、辻村公一とハイデガーを読んでいたとき、辻村自身が西田をひきあいだし「現在」という位相をきわめて重視していたというように、ハイデガー的な「未来」への「先駆」に対し、西田が重視していたものは、まさしく「永遠の今」なのだとおもいます。もちろんこの今は過去も未来も含みこむものであり、九鬼的な永劫回帰や、後期田邊の死生とさまざまな連関をもつものですが、しかしここでの「現在性の深み」という発想は、バロック性という事情を考えるときに、非常に重要だとおもいます。これも余談ですが、あれほど相対性理論と光の速度と、結局もつてわれわれは視覚において何をみているのかを論じる大森でさえ、「過去」を「いま・ここ」でみているのであり、いかに物理学が約八分前の太陽をみているのだといったところでそれは約八分前の太陽をいまここでみているというあり方は崩しません（その上で物理学の言語を重ね描きするわけです）。これもまた京都学派とはまったくことなつた「現在の深み」の探求であるわけですが、私は日本哲学においてこうした「重層的な現在」という主題が、さまざまな変化を被りながら（マルキシスト的、科学哲学的、ポストモダンの……）展開されていることは見逃しえないこととおもいます。バロックの哲学も、おおよそこうした視角との関連からでてきた発想にほかなりません。

一、バロックの哲学

バロックの哲学との関連において西田を論じるときに、ポイントとなるのは、西田哲学を世界思想の論脈のなかに

開放することだとおもいます。

西田の思想をみれば、その世界同時性はきわめて顕著だとおもいます。いうまでもなく西田は、初期にはプラグマティズムの影響を強く受け、議論を開始しました。『自覚に於ける直観と反省』の序文には、プラグマティズムに加え、ベルクソンや新カント派、あるいはフイヒテ等があげられつつ、それぞれを吟味批判しながら悪戦苦闘した様子がはつきりとみとれます。同時に、この著作における微分論もそうなのですが、西田が数学や自然科学に多大な関心を持ち、とりわけ晩年の著述において、物理学や生物学をあつかいつづけていたことも重要かとおもいます。ヘーゲルやライブニッツがいたるところにでてくるのは当然としても、西田の「時代」への寄り添い方はある意味で非常に特徴的です。私は、個人的には『自覚に於ける直観と反省』の、いまならどこからも出版されないであろう記述の仕方がきわめて好きなのですが、あれはさまざまな思考のモザイクのようにみえ、まさにバロック的なものと近接しているようにおもえます。いろいろな意味で、西田は「時代のなか」にいたひとで、なおかつそのことにきわめて敏感であつたのではないかといいたいのです。

こうのべると、あたかも西田のオリジナリティを否定しているようなのですが、そうではないとおもいます。西田が思想において重要なのは「骨」を掴むことだとのべていたことは知られていますが、西田こそ、その「骨」のつかみかたが絶妙にうまくつた人であるようにみえるのです。それゆえ、ある意味で淡々と世界同時性へのつかり、それを自己に内面化し、独自の思想を編むという相当に高度なことが可能であつたのだとおもいます。もちろんそこには禅の体験などが重要であつたことはもちろんでしょう。しかし私には、西田は通常想定されている以上にモダンな構築物をつくりあげたようにみえます。しかもそれがさまざまな破断や断絶にみち、西田自身がその方向性を二転三転させたことから、まさにそう感じるのです。世界同時性においてあるということは、西田のオリジナリティを否定

するものではなく、むしろ相当に慎重な思想の構築物を、鋭敏な感性をもちながらつくりあげたことを意味するのではないでしょうか。

こうした西田の世界同時性を考えるときに、バロックという言葉を使ってみたとおもいます。ただしバロックという言葉はきわめて多彩に使われ、美術や演劇、思想そのものにも関与する言葉です。そのためまずはバロックということで何を想定しているのか描いてみます。

私がバロックという言葉を使うことには二つの典拠があります。

ひとつはまさに坂部恵が、『モデルニテ・バロック 現代精神史序説』（哲学書房）を書いているということがあります。そこで坂部は、美術史に由来するバロックという言葉をかなり自由な仕方、ベンヤミンをはじめボードレーや萩原朔太郎などに援用し、近代における時代精神としてのバロックを論じています。そのなかで坂部は、西田の思想も広い意味ではバロックの圏内にはいるものとして描きだします。それは、西田もライブニツ的な近代初期のバロック思想の影響を受け、ある種のモナドロジ的な発想をついでいること、そして西田後期の思考にみられるさまざまな断絶や接合（まさに「絶対矛盾的自己同一」がそれに該当するかとおもいます）などを考慮すれば、さほど無理な発想でもないとおもいます。

そしてもうひとつはドウルーズです。ドウルーズは晩年に『變 ライブニツとバロック』という作品を著し、バロックを古典的なものと現代的なものに分類します。そこでのドウルーズの議論は、現代建築などさまざまな題材をあつかいつつも、基本はライブニツに即して進められていくのですが、途中でホワイトヘッドに多くの頁が割かれる箇所あります。そこでは、バロックを考えたときに、ライブニツがある種の多なるものの収束をもたらす古典的バロックであるのに対し、現代的なバロックとは、ホワイトヘッド（おもに『過程と實在』）にみられるような、開放的で

収斂しないものだといのです。ドウルーズは、ホワイトヘッドの難解で一筋縄ではいかない思考を解きほぐすのですが、そこは *su-jet* ならぬ *super-jet* 「自己超越体」を重視し、またホワイトヘッド独自の用語である「永遠的対象」(eternal object) やその「侵入」(ingression) について論じながら、バロック性の思考を深めています。この点については仔細に考えるべき点がたくさんあるのですが、いまはおくします。

こうした思想の区分にどこまでの意味があるかはわかりません。しかし、坂部の着眼や、あるいはドウルーズの議論は、西田の世界同時性を考えるヒントになるのではないかとおもいます。ドウルーズ自身がそうであつたように、西田は『自覚に於ける直観と反省』で、まさに「微分」を利用して議論を構成しますが、これはドウルーズの思考の中でのバロック性に強くむすびついています。そして西田の絶対矛盾的自己同一やポイエシスという発想は、ホワイトヘッド的な開放的バロックとおおいにかかわるものだとおもいます。

こうした方向に西田を定位することは一つの可能性を示唆するものとしては意義があるのではないのでしょうか。そしてドウルーズがのべる、開かれたバロックという方向に、なんとか西田を位置づけることはできないでしょうか。

二、西田のバロック

バロックの哲学については『思想』(岩波書店)に一連の文章を連載させていただきました。ここでは坂部やドウルーズを軸として、オルテガ・イ・ガセット、ホワイトヘッド、ベンヤミンをあつかいました(これに本来は九鬼、レヴィンストロース、それに西田と新カント派を付加して書物にしたいというのが私の願望です)。坂部やドウルーズの議論に呼応しつつ、これらの思考の特徴をまとめてみます。

そこでポイントになるものがいくつかあるかとおもいます。

ライブニッツも、ある種のアライメントヘッド主義も、数学的な無限小から無限大までにおよぶ、無限にまつわる議論をあつかいます。そこでは主体というものがあらかじめこの世界に存在し、それが核になって世界そのものを構成するという、いわばデカルト——カント——フッサール型の世界観はとられません。微分的な思考とは、とりわけそれに折りたたまれる無限の襞がポイントになるように、あらかじめ成立する個体を問題にするのではなく、数学なり物理学なりの技法によつてみいだされる（さまざまな襞に充ちた）多重性から、自己なるものが形成されてくることを論じるものです。ライブニッツ的な個体であるモナドが、「鏡」という西田にも関連する比喻をもちいつつ、世界の（神の）ある側面を自己として規定するように、連続した世界のなかでの個別的な自己の成立がそこで論じられています。相互に映しあう、そこでの相互転換が果たされるということ自身がバロック的なものです。そこでは主体の側も、また客体の側も、強い二項性を構成するのではなく、それぞれが相互的な関係性のなかから出現してくると描かれます。多くの場合、主体と客体は相互的に含みあい、それ自身が一でありつつ多であり、多でありつつ一であることになります。

ホワイトヘッドは、文脈はおきますが、このことを「カント哲学を逆転する」といういい方によつて表現しています。感性論からはじまり、統覚を巡つて議論を構成するカントではなく、最後に自我なるものが「でてくる」そうした行程が重要だということです。これはきわめておおきな視点だともいえます（よく知られていることですが、ドゥルーズの『差異と反復』は構成上まさしく『純粹理性批判』の転倒です。弁証論や理念論からはじまり、最後に感性論に到るのですから）。ホワイトヘッドを引用してみます（引用は『過程と実在』平林康之訳 みすず書房を参考にしております）。引用ページ数は A.N. Whitehead, *Process and Reality* (Gifford Lectures Delivered in the University of

Edinburgh During the Session 1927-28), Free Press, 1979) からのものです。

有機体の哲学は、カントの哲学の逆転である。『純粹理性批判』は、主体的な与件が客体的な世界の現象へと移行する過程を記述している。有機体の哲学が記述しようとするのは、客体的な与件がどのように主体的な満足に移行し、そして客体的な与件における秩序がどのように主体的な満足における強度を提供するのかということにある。カントにとっては、世界は主体から現出する。有機体の哲学にとって、主体というよりも自己超越体は、世界から現出するのである (PR88)。

この背景には、連続性にかんする数学的思考が控えているとおもいます。

ベルクソンが持続を論じたとき、それがいかに心理的なものの規定からはじまっているとはいえ、連続体をどうとらえるかが重要でした。ベルクソンは異質的なものの不可分性をのべることによって連続性を規定します (等質的なものは、無制限に可分なので、連続ではありません)。そしてこうした連続体をどう思考するかという骨組みは、もちろんライブニッツ的な微分論からはじまり、十九世紀末にはデデキントの連続体切断や、カントールの集合論をへて、さまざまな思考に影響をあたえています。『自覚に於ける直観と反省』で西田が、純粹経験の連続性に切れ目を入れるため、デデキントや、カントールに相当の関心を払っていたことに、このことは連関します。また西田は、中期以降ベルクソンの議論を厳しく批判しますが、それはこうした連続体の思考について共鳴しながらも、しかしそれを越える部分において批判が必要になったということかとおもいます。所謂ベルクソンの思想には「死」がないという批判は、つまりは「切断」についての思考がベルクソンでは不十分であり、それがないと個体という位相がとらえ

られないということにその焦点があります。前提として連続体の思想は必要で、それに対し連続性に切断をいれる発想がでてきたということかとおもいます。私は自覚論の大きな枠組みは、こうした数学的な思考が基盤になっていると考えます（自己限定としての自覚自身、その鏡の比喩からしても反省＝反射装置として強く論理的なものを感じます。もちろんそこで無限の自己反射的な論理としてロイスが引用されていることも含めてです）。

はなしが逸れました。まとめます。バロックの思考で重要であったのは、ある種のカント主義の転倒であり、主体（ましてや超越論的主観性）から事を開始するのではなく、主体も客体も一体化した事態（純粹持続であれ純粹経験であれ）において、その微細な襞をたどることにより、主体がそのなかから形をとる事情を描くことでした。ホワイトヘッドの自己＝超越体としての主体の形成にせよ、あるいは西田の自覚にせよ、それは、主客一体性がどのようなかたちで個体に分化するかのプロセスを辿るものであり、ドゥルーズが『差異と反復』で、十九世紀微分哲学を導入しておこなったことはこれらの広い意味での（直接的な影響はなくとも）後継であります。このことはまさしく、ライブニッツ、ベルクソン、ホワイトヘッド、そしてドゥルーズに繋がっていく思考の系譜のひとつのポイントに西田がいることの証左にほかなりません。このような系譜を考えることが、私には現代において不可欠におもえるのです。

これらの点に関しては、ほかにもいくつかの論点を列挙することができます。

西田は後期にいたるにつれ、「自覚」としての限定に、たんなる連続体からの切断という要素だけではなく、垂直的な位相をとりいれていくことになります。『無の自覚的限定』所収の「私と汝」などにみられる他者論、いや他者——自己相互限定論とでもいうべき議論は、まさに自己と他者を相互に相互を含みあう存在としてあつかうとともに、たんに平面的な事態が錯綜するのではなく、自己と他者との経験の深淵である相互の底において、その絶対の他において自己をみるという相互垂直的嵌入の構造を描いています。これもライブニッツの正当な継承であり、

主体性を中心視しないという流れのひとつのかたちを示しているとおもいます。『無の自覚的限定』は、垂直的に掘り下げた「絶対無」を、無底としておくだけではなく、それを「永遠の今」「死を含む生」「他のなかの自」という垂直性と水平性との絡みあいのなかで描きだしている点が、この観点からみても重要なのです。「絶対無」という言語化できない無底の底を経て描かれる中期後半以降の西田の議論は、こうしたバロック的思考の成熟ともとらえられます。

三、西田後期とホワイトヘッド的ヴィジョン

西田におけるバロック的な姿勢は、とくに後期の西田において、そこでの反転可能なさまざまな事象の変幻自在な交錯というあり方そのものによつてこそ、より激しくなっていくとおもわれます。そこでは、ポイエシスや絶対矛盾的自己同一がテーマとなる場面で、ホワイトヘッドとの関連はより強固になるようにみえるからです。

たとえばつぎの西田の言明と、ホワイトヘッドのそれとを、類縁性のあるものとしてあつかうことは難しくないでしょう。

世界が内的即外的、外的即内的に自己自身を限定する、所謂主観的・客観的、客観的・主観的に自己自身を限定すると云ふことは、世界が自己自身を形成することであり、絶対矛盾の自己同一として、それが自己を創造することである。……内的即外的、外的即内的に、即ち主観的・客観的、客観的・主観的に、世界が自己自身を限定すると云ふことは、世界が個性的に自己自身を構成することである……個物は個物に対することによつて個物で

あり、多即一・一即多として世界が絶対矛盾の自己同一的に自己自身を限定するといふことは、個性的に自己自身を構成すると云ふことである。何処までも特殊なものと共に一般的なるもの、個物にして一般なるものが、個性的なものである（『全集第8巻』岩波書店 二四〇頁）。

これは一例にすぎませんが、西田の後期の議論において、一即多多即一、内在即超越、超越即内在、内包即外延、外延即内包、作るものと作られたもの、自己と環境などの相互反転はさまざまに語られています。そこでは、深さそのものが表面にせり上がった立体的な平面・多次元的な平面とでもいうべき世界において、内側と外側とがさまざまにいかわる局面が描かれていくのです。

これに対して、「神と世界」におけるホワイトヘッドの記述（PR348）の記述をみてみましょう。これについても列挙してみます。

「神が恒常的で世界が流動的であるというのは、世界が恒常的で神が流動的であるというのと同様に真である」。「神が一で世界が多であるというのは、神が多で世界が一であるというのと同様に真である」。「世界が神に内在するというのは、神が世界に内在するということのと同様に真である」。「神が世界を超越するというのは、世界が神を超越するということのと同様に真である」。「神が世界を創造するというのは、世界が神を創造するということのと同様に真である」。

主体と世界との関係が、ここでは神と世界との関係になっていますが、ここでの思考の方法は相当に同型的にみえます。とりわけホワイトヘッドの最後の文言は、ポイエシスと行為的直観を論じる西田が、作るものと作られるもの、作る主体と作られる環境とを、つねに相互的なからみあいとして論じることとかなりあいます。ここまでバロック的な方向性が強くなると、これらの一連の記述にはアレルギーを抱かれる方もおられるのではないかとおもいます。

また、かなり抽象的な観念的世界だという批判があることも確かでしょう。

しかし私は、精神性と物質性、能動性と受動性、いわば動くものと動かされるものが双方反転するというヴィジョンは、「私と汝」における自己と他者の相互的な深さにおける交錯、あるいは「永遠の今」や「生のなかの死」がもつ徹底した深度と表面の接続をひきうけ、それを過激化したものだともいえます。後期西田の主題のひとつが「形から形へ」であることはやはり重要で、そこでは深さそのものを「絶対無」のように示すのではなく、あくまでも「絶対無」として垂直の位相を堅持しつつ、それを形のなかに重層的にたたみ込まれた多次元性として（まさにバロック性として）とらえなおされるからです。西田ののべていることは、あらゆるものが無限に変化し転変するが、そこで生じるものと消えるもの、産まれるものと死にゆくもの、来るべきものと痕跡にしかないものが相互錯綜することの世界の実相を的確にとらえるものだとおもうのです。私はその意味で西田後期の文章を読むと、ホワイトヘッドの一種の文章と同様に、眩暈さえを覚えますが、それは西田が『自覚における直観と反省』から終始のべつづけていたことの正当な帰結でもあると考えます。

四、これからの西田

別件ですが先週、ヨーロッパ日本哲学ネットワークというのにお邪魔してまいりました。バルセロナで昨年一回目が開かれ、今年（二〇一六年）はブリュッセルでした。来年（二〇一七年）はパリで開催のようで、パリ第十大学のエリー・デュリニングや多くの翻訳者とともに共同でワークショップを企画しております。（二〇一七年十一月におこなわれました。）

その日本哲学ネットワークで、少し驚いたのが、昨年共訳したブラジルの人類学者のヴィヴェイロス・デ・カストロの『食人の形而上学 ポスト構造主義的人類学への道』（洛北出版）について、ブラジルとフランスの研究者が突然インタビューしたいといってきたことです。何故日本のドゥルーズと西田に関心がある研究者がブラジル人類学を読むのが、相当の興味をひいたようです。もちろん、私が翻訳に加わったのは、ヴィヴェイロス・デ・カストロがドゥルーズⅡガタリの『アンチ・オイディプス』によつて後期レヴィ・ストロースを読み下そうという学者であるからなのですが、そこではブラジル側から（しかも人類学にとつて記念すべき土地であるアマゾンの側から）西洋の論理をひつさげた人類学者が現れ、アンチ・ナルシス（これ自身、ドゥルーズのアンチ・オイディプスに対する反撃です）を標榜して、非西洋からの人類学の試みが開始されていることがとりわけ重要だとおもったからでもあります。翻つてわれわれがなすべきことを考えるならば、それはまずもつて「日本」にあるはずです。西田は、最初からのべたように、私にはきわめてモダンでバロック的な思想家であるようにおもえます。しかしそれゆえ、西田のバロックが、あくまでも「日本的なバロック」であるということをも、もう一度非西洋人としての哲学者であることからえなおすことが必要ではないかとおもえるのです。それは西洋バロック的な色彩の強い西田哲学をいったん定位したあと、なおもそこにみいだされる非西洋的な位相を、固有の日本哲学として開いていく作業ともいえます。それは東と西との対立ではありません。いったん西洋を徹底して論理化した日本語の哲学が、西洋に何を返せるのか、あるいはヴィヴェイロス・デ・カストロのブラジル人類学のように、何の反撃ができるのか、それが問われている時代になっているのだと感じました。こうしたことは、坂部や中村が、ポストモダン哲学が導入されたときに、あえて西田や日本哲学を読みだした経緯を、もう一度異なった段階で辿りなおすことでもあるのではないかとおもいます。その成否は今後の日本哲学研究のあり方をおおきく左右するのではないのでしょうか。

以上で拙い発表を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

注

(1) 本稿は、二〇一六年十二月十七日に京都大学文学研究科で開催された日本哲学史フォーラムの講演の原稿である。それゆえ、口語体になっていることをお許しいただきたい。またこの機会を与えてくださった京都大学の上原麻有子先生に感謝いたします。

(2) この大森の秀逸な西田評は、「駒場の下村先生」『下村寅太郎全集 第七卷』月報四に記載されているものである。